

北朝鮮の強制収容所をなくすアクションの会「NO FENCE」会報

NO FENCE



vol. 47 2018年2月

〒102-0093 千代田区平河町1-5-7-203

nofenceinfo@gmail.com

<http://nofence.jp/>

INDEX

北朝鮮国内のコッチェビたち (小川晴久) 2

金革氏講演会報告 (大宅京平) 5

コッチェビの日本訪問記 (金革) 7

NO FENCE 総会を **4月21日(土)** に開催します。
会場は人権ライブラリー (東京都港区)、
ゲストは金柱聖さん (帰国脱北者) を予定。
詳細は追ってお知らせします。



1月20日、金革さん(左)の講演会より

2018.1.20 金革氏講演会 北朝鮮国内のコッチェビたち

代表 小川晴久

コッチェビと言え、^{はなつばめ}花燕、すなわち子どもの浮浪者たちのことで、中朝国境で流浪している北朝鮮の子どもたちという理解が、日本では一般的です。しかし、昨年9月日本で翻訳刊行された^{キムヒョク}金革著『自由を盗んだ少年』（太田出版）はこのイメージを大きく変えます。金革氏の体験は、北朝鮮国内でのものであり、少年だけでなく全社会の階層に広がり、この講演会の質疑で明らかにされたのですが、今や人口の1割近くにも上る大きな勢力になっていると言います。以下の報告は、当日の金革氏の講演内容をベースにして、上記の本や彼の修士論文「北朝鮮のコッチェビ研究」をも参照して、報告者（小川）が再構成したものであることを、お断りします。

幸せな家庭なのに、7歳でコッチェビに

1982年生まれの金革氏は今年、数え年で37歳。小柄で礼儀正しい明るい若者であった。北の拘置所や教化所（刑務所）で明日死んでもおかしくないほど虚弱児になっていたとは思えない若者であった。生まれは東海岸の清津市。7歳でコッチェビになり、2001年9月にソウルに亡命する18歳まで、11～12年コッチェビ生活をしたコッチェビの代表者と言ってよい。

彼は、父が元対南工作員で、金日成の署名入りの時計を持つ「英雄」で、特殊部隊警察官。母は科学繊維工場の作業班長で、2つ違いの兄を持つ4人家族の末っ子で、幸せな生い立ちであった。しかし彼が4歳のとき母が亡くなり、父が後妻をもったため、まず兄が家出してコッチェビとなり、3年後の7歳のとき、兄が実母の写真を見せて、今の母は本当の母ではないと伝えたので、彼も家出するようになった。コッチェビ生活の始まりである。生きるため食糧のひったくりはせざるをえなく、はじめはドキドキしながら、そのうち当然の行為となった。生きるためにである。

まず、行きたくてもいけなかった遊戯公園へ行く。11歳のとき、兄と二人で平壤に向った。しかし平壤の手前の^{カンリ}間里までしか行けなかった。その帰りなのか、1991年頃^{キルジユ}吉州に止まり市場でトプチギ（ひったくり）を始める。1992～93年頃、自分たちで「チェビ群れ」と称しはじめた。

コッチェビの三大覚悟

コッチェビには三大覚悟が必要だと言われた。①凍え死ぬ覚悟、②殴り殺される

覚悟、③飢え死にする覚悟。殴り殺される覚悟とは、市場で物を盗むとき、市場で商う女性たちの亭主が怒りに任せてコッチェビたちを半殺しにするからである。

1993 年頃からコッチェビ急増

1989 年の東欧の崩壊、1991 年のソ連の崩壊で、北朝鮮は急速に苦しくなる。1994 年の金日成の死ののち、彼らの住む清津市では配給制度が停止した。両親たちは食糧を求めて「行訪」(行商)に出て、家を空けるようになり、子どもたちは家に取り残され、家に残った食糧で飢えをしのがざるをえなくなる。食糧が足りなくなると、子どもたちは外に出て、食糧をあさる。コッチェビになる。1993 年頃からコッチェビが急速に増えたと彼は言う。

コッチェビの生きる方法

トプチギ (ひったくり) : 駅売りと市場でのと大別される。

パジャングン (ばらまき役) : 売り物の容器を地面にひっくり返して中身をばらまく役で、それをひったくり役の少年たちが複数でかささらっていく。彼の兄は大胆なパジャングンであったという。力が強く、動作が素早くなければならない。

攻撃手 : カミソリの刃を使ってリュックサックやポケットから物を盗む。剃刀の刃は口の中 (下あご) に貼り付けておく。

スリグン (すり)

ジュルタギ (つなひき) : 洗濯物を盗むこと。

ムンチギ (空き巣) : 事前の下見が必要。彼の兄は得意であったという。

女のコッチェビは、山に入って山菜とりや、川で砂金を取る。またコッチェビ集団の洗濯や炊事もする (修士論文より)。

1994 ~ 95 年, 兄弟捕まる

コッチェビが急増してきたので当局は「非社グルパ」(非社会主義的行為を取り締まる組織)を増強し、その中で兄弟も捕まってしまう。父親が呼び出され、家に連れ戻されるが、継母が嫌いな兄弟のため、父親は清津の北部にあった山中の 49 精神病院に勤務が代わったので、息子たちと 3 人で、そちらに移り、約半年子どもたちを牛の世話、畑仕事、山での枯葉集め、海でのワカメ拾い、湖での鯉の捕獲など、自由にさせたという。ワカメや鯉を市場で売って生活費にしたという。金革氏はこの 6 カ月間が半生の中でいちばん楽しい時期であったと回想している。

しかし父の勤務が代わったのか、また清津の自宅に戻り、父親は兄弟を孤児院 (鍾城継母学院)に入れる。

悲惨な孤児院

「経済危機の後に北朝鮮を襲ったのは家庭崩壊であった。多くの家庭が破たんし、子どもたちが孤児院に送られた。子どもたちにとって孤児院は監獄のような場所だった。朝から晩まで集団生活が基本で、統制も一般学校より厳しかった。とくにぼくらのように自由に放浪していた子どもたちが孤児院に入ると窮屈で息が詰まった。」(本書 114 ページ)

食糧事情も悪く、当時 6 歳から 17 歳の孤児が 275 名いたが、2 年後の 1997 年度には 75 名しか残っていなかった。栄養失調、疥癬、腸チフス、パラチフス、肺結核等の病死による。

1996 年 1 月、父も路上で餓死していたが、彼がそれを知るのは数年後である。

中国に脱北し、密告されて鍾城保衛部、穩城安全部で拷問を受ける

1998 年 3 月孤児院を卒業し、木材伐採場に配置されたが、仕事がきつく、9 月に中国に脱出する。国内で苦境を救った女性に裏切られ、密告されて、保衛部の取り調べや安全部(警察)の取り調べを受けるが、前後 3 カ月間の取り調べは拷問の日々であった。保衛部では殴る蹴る、安全部の分駐所では鳩拷問(後ろ手で固定され、前のめりの形で何日も置かれるので、胸がハトのように膨らんでくる)、膝を曲げさせ、脛と太ももの間に角材を入れて踏みつけるという拷問がきつかったという。そこから拘置所に移され、判決が出るまで 6 カ月の間に、同室の仲間たちはどんどん命を落としていった。懲役 3 年の判決が出て、全巨里教化所で服役。

生き地獄の全巨里教化所

咸鏡北道会寧市にある全巨里教化所は深い山奥の谷間にある。教化所は刑務所のことであるが、全巨里の酷さは強制収容所(管理所)のそれと変わらないことが、以前韓国の NGO(NK データベース)の金尚憲さんたちによって紹介されているが、金革氏の体験とその証言によって明らかになったのは貴重である。

教化所でいちばん恐ろしい病気が発熱と下痢、肺炎、結核だったという。教化所では虚弱の程度によって教化班が決められたが、彼は肺炎になった後、下痢にかかり、3 号病班に移された。病班は 1 号から 3 号に分かれていて、3 号から順に 1 号(薬も効かず、ただ死を待つのみ)に移されたが、17 歳の若さで死んでたまるかという気持ちと、兄に会いたいという強い希望が彼を死から救った。

教化班に戻ったが、そこには虚弱者を痛めつける狂人のような朴組長がいて、彼の殴打や蹴りを絶えず受けた。この組長のいじめで多くの囚人が命を落とした。彼

は教化所の指導員に朴組長の酷さを訴え、監視役の仕事を与えられ、この組長と対決していく。幸いなことに刑期の半ばで大赦(朝鮮労働党55周年,解放55周年)が出て、社会に出ることができた。彼を含めて23名が全巨里教化所に入所したが、このうち2名だけが生きていた。彼は149cm, 39kgの体重であった。入るときは罪囚, 出るときは「英雄」であった。

2001年1月2日に延吉を出発し、7月5日にモンゴルに入り、9月1日韓国に亡命することができた。

感 想

北朝鮮の総人口中約1割がコッチェビであるという彼の話に、一同がびっくりした。国内でこれほど多くコッチェビを生み出す要因は、配給制度の停止, 食糧危機である。核開発を止め、その財源を食糧確保に向けなければ、コッチェビはどんどん増える。

また、学校における毎週のような生活総和(自己批判と他者批判)がいかに子どもたちの人間関係を壊しているかが、本書の金革氏の体験と証言でよく伝わってくる。この生活総和は全階層で実施, 強制されている。生活総和があるかぎり、コッチェビは増えつづける。彼らは自由の味を知ったからである。

本書と金革氏の体験が教えてくれるものは、意外なほど大きい。

金革氏講演会報告

大宅京平

1月20日、早稲田奉仕園で『自由を盗んだ少年』の著者・金革氏36歳の講演会が約3時間開かれた。うち2時間は著書に記された内容で、約1時間が応答であった。彼の生立ちや経歴は著書に詳しく記されているので、応答部分を整理して報告します。

コッチェビの種類

北朝鮮で○○チェビ(浮浪者)は5種類ある。

第1が、コッチェビと言われる19歳以下で、暖と食糧を求めて浮浪生活をする者で、昔から存在した。

第2が、青チェビと言われる30歳以下の青年浮浪者で、コッチェビを10～40人くらい組織化し、人々から恐れられている。

第3が、軍チェビで、栄養失調による一時帰宅または脱營した軍人浮浪者。

第4が、老チェビと言われる、1990年代の苦難の行軍時代に食糧難のため自ら家を出た50歳以上の老人浮浪者。

第5が家族チェビと言われる家族浮浪者で、海辺にテントを張り、貝採取などを行っているという。

こうした浮浪者は、北朝鮮人口約2400万人中230万人を占めるという。根拠は、茂山、清津、会寧出身の脱北者から学校の出席率や職場の出勤率を聞き取り調査した結果だという。

韓国定着後の再出国

韓国定着後に他国に渡るのは、北朝鮮では生活上自己決定する必要がなかったが、韓国ではすべて自己決定が必要で生きづらい。そのため福祉国家をめざして出て行くのではないか。

一方、韓国でどうすれば金儲けできるか、不動産取引を教えてくださいというような、積極的に韓国社会に溶け込もうという脱北者も増えているという。

北朝鮮の市場

北朝鮮では2003年から市場が急増し、市場税も急増しているという。税は1日1500～4500ウォンで、清津の水南市場だけでも1日8千万ウォンにもなるという。全国には大小440の市場があり、税収入は年間約7千万ドル（約70億円）にもなるという。

こうした市場活動により外貨で富を蓄えた者は金主（トンジュ）と呼ばれ、アパート建設などに投資しているという。例えば30世帯のアパートに10万ドル出資すれば10～12世帯が金主に与えられるそうだ。実に10倍以上の儲けだ。

このように、市場をめぐる状況は大きな変化を見せているが、拘禁施設のような場での権力統制は変わっていないという。

北朝鮮の動きと対応

彼は、国連による経済制裁の影響は大きく、北朝鮮は平昌オリンピックを最大限利用して対外関係改善をねらい、対話を持ち出すと述べた。この発言は北朝鮮の韓国抱き込み策として実現された。

最後に、彼は、北朝鮮の人権改善のためには、国際社会が関心を持ちつづけることで、北朝鮮が変化せざるをえない状況を持続させることが重要だと述べて講演を終えた。

コッチェビの日本訪問記

金 革

2018年1月18日から21日、3泊4日で日本を訪れた。訪日は数年前の対馬以来だ。日本本土、特に東京訪問は初めての経験であり、強い好奇心を抱いた。きっかけは、拙著『自由を盗んだ少年』が日本語に翻訳され、TV東京の出演依頼があったから。ここにNGO「No Fence」の講義要請が加わり、予想外に慌ただしい時間を過ごした。

羽田空港に到着したとき、天気は暖かかった。ソウルより6～7度は気温が高かったようだ。出迎えた放送局関係者の案内でタクシーに乗ろうと荷物を引いていたら、タクシーの運転手が親切に載せてくれた。韓国ではあまりない光景だ。タクシーの運転手が直接荷物を載せてくれる姿は、空港に限らず、ありふれたものだと聞いた。

ホテルに移動する間に通り過ぎる建物や、憧れの象徴「東京タワー」は一目でその威容を轟かせていた。狭い道路、色とりどりの道路標識、車両が一行に並び簡単に割り込まない姿も印象深かった。クラクションを鳴らす車は見なかった。ホテルまでの移動時間は約25分だったが、タクシー料金の高さには驚いた。

ホテルの部屋は小さい。東京の中心で地価が高く、コンパクトなものを好む文化的な要素も相まって、韓国のモーターサイズの部屋が1泊3万円に迫る。韓国のカネで30万ウォンに近い額だ。だが部屋の中にシャワーはじめ必需品が揃い、知人の言う「部屋は小さくても、必要なものはすべてある」という表現は正しかった。

ホテルの朝食は、ヨーロッパや韓国で出る朝食と似て食べやすかった。毎日コーヒを飲む私は、ホテル近くのスターバックスを見つけ、アメリカノを一杯頼んだ。460円程度で、韓国より500～600ウォンほど安いのは不思議だ。

また、道でタバコは吸えないが、一般的なレストラン内ではタバコを吸える点に驚いた。慣れた、また慣れぬ光景だ。北朝鮮では家でも食堂でも構わずタバコを吸っていたのだからおなじみだが、韓国の食堂は禁煙なので、とまどいもした。

食べ物は、先入観と違って甘くはなかった。日本の食べ物というと、甘くて脂っこいものが多いと思っていたが、私が食べたメニューに甘さはあまり感じられなかった。No Fenceの宋允復先生の気づかいで、庶民的な食堂にお連れいただいたが、日本のふだんの食文化を体験できる絶好の機会であった。

放送の撮影過程で韓国と違ったのは、観客やMC、サポーターの反応がかなり良かったことだ。反応が多少粗い韓国とは異なり、撮影過程の参加者は積極的に反応し、

深い関心が感じられるほどだった。撮影に要した時間と実際に放送された時間の割合は韓国と同じようなものだったが、撮影時間は比較的短く、あまり疲労しなかった。

東京の公共交通機関、地下鉄は思いのほか古い感じがした。特に地下鉄の路線は韓国に比べて複雑で、カードを使わず小銭で切符を買っての移動では、追加料金の支払いや返金で煩わしかった。大衆交通手段の乗り換えに要する料金は、韓国に比べると高く感じられた。

20日、No Fenceで講義するのに先立って、小川晴久会長に会った。日本で北朝鮮人権活動を長らく展開された方であり、北朝鮮人権市民連合20周年行事にも直接来て韓国語で発表なさった様子が、かなり印象深かった。北朝鮮人権市民連合のユン・ヒョン理事長とも深い親交をお持ちで、北朝鮮の人権のために誰よりも労を投じてくださった方に日本で直接お会いし、全身に緊張が走った。教室の黒板には「2018年1月20日ノーフェンス 『自由を盗んだ少年』 著者：北朝鮮に統制の効かないコッチェビ集団の台頭、金革氏語る！」という講義案内が大きくかかっていた。

宋允復先生の助けを借りて講義を進めながら、かなり驚いたのは、講義に参加した方々の70～80%が年配であり、高い年齢層にもかかわらず、講義内容の集中度、情熱が信じられないほど高かった。事前に個人的な話とコッチェビの学術的な内容をどう組み立てればわかりやすいだろうかと悩んだのだが、参加された方々のコッチェビへの関心が非常に高く、私自身がはるかに多くを得ていくようだった。4時間もの講義時間にもかかわらず、むしろ時間が足りず、多くの質問をお受けできず惜しかった。

講義を終えた後、夕食のために移動した場所は、半地下にある小さな食堂であった。ビールと日本酒、そして様々な串料理が出た。ここでも、大学教授や大学院生、博士課程の学生、小川会長の著作の編集者、一般の会員など10名ほどの方々とコッチェビや北朝鮮の体制、社会、市場などについて話を交わしつづけた。北朝鮮に対する日本人の関心は、私が予想していたよりもはるかに強かった。

21日の朝、中川マサヒト先輩と朝食を共にし、急いでホテルに戻ると宋允復先生が待っておられた。19日夕方から21日の空港までご一緒してくださった宋允復先生と食事もできず、空港で別れたのは非常に残念だった。物足りなさを覚えつつ出国手続きを終えた私の頭は、「北朝鮮はオリンピックでどんな動きを見せるだろうか」で占められた。それは飛行機の機中でも続き、いつの間にか金浦空港に到着した。

私の初めての東京の旅は、こうして終わった。この慌ただしい日程で日本人の行動や生活のすべてを理解できないのはもちろんだが、一人で道を歩いて感じた日本人の姿は、私とそれほど変わったものではなかった。いつか機会が訪れたならば、日本をもっと体験したい。北朝鮮について伝えつつ、日本を経験できればと願う。